

テモテへの手紙Ⅱ 1章 8-14 節 「恥じないように」

テモテへの手紙は、使徒パウロによって書かれた最後の手紙とされています。エフェソで牧会をしていたテモテが、教会の問題で疲れ果て、弱ってしまいました。そこでパウロは「恥じてはなりません」と、テモテを励ます言葉を記したのです。いったい何を「恥じてはいけない」のでしょうか。その答えが 8 節の「わたしたちの主を証しすること、わたしが主の囚人であること」とパウロは言うのです。かつては神から与えられた務めに燃えていたテモテ。しかし、今や燃え尽きる寸前のような状態になっていたのです。テモテがそうってしまった理由、それは自分が年若く未熟な者であること、教会の異端の教師の問題など多くの問題があったからでした。

神の御心はどうであれ、困難からは誰だって逃げたいと思うものです。牧師としての務めも捨てて、故郷に帰ってしまいたい。パウロには彼の気持ちが手に取るように分かっていたのです。だからこそパウロはここでテモテに言うのです。「わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません」と。もし主の証し、主の十字架と復活を誇りとするならば、またこのように囚人となっている私を誇りとしてくれるなら、神の力に支えられて私と苦しみを共にしてくれ。あなたには力と愛と思慮分別の霊が与えられているではないか。だから苦しみを共に耐え忍んでくれ。そのようにパウロは言いたかったし、伝えたかったのです。これは、パウロから私たちに向けての言葉でもあります。私たちもまた、困難に直面するとき、苦難の中に置かれるとき、できることなら逃げ出したいと思うことはいくらでもあるからです。そのような私たちに、私たちの心にも「神の力に支えられて、苦難を共に耐え忍んでください」という言葉が響いているように思います。

苦難から逃げ出さないで、そこに留まって耐え忍ぶことができるとするならば、それはパウロの言うように、「神の力に支えられて」のことです。そして、その神の力は信仰によって私たちに与えられるのです。どこまでも主に信頼し、どこまでも主を待ち望む、その信仰によって与えられるのです。神が託されたのならば神が守ってください。神が与えた使命ならば神が全うさせてください。耐え忍ぶことが神の御心ならば、神が全責任を負って支えてください。そのようにパウロは「自分が信頼している方を知っている」。だから生き方を恥じてはならない、信じていることを恥じてはならないと伝えました。すべては自分の行いにかかっているのではなく、神の御業にかかっている。だから私たちが第一に為すべきこと、それは神に信頼することなのです。

そしてその信頼のもとに、恵みが最初に私たちに与えられる、とパウロは考えました。恵みが無条件に何よりも先に来る。パウロはいつもその事実を目を向けてきたのです。そして、その恵みに目を向けさせようとしているのです。テモテは確かに「ゆだねられている良いもの」を守らなくてはならない。テモテには与えられている務めがあります。しかし、それを実現するのは恵みによってすべてを始めてくださった神御自身です。神自ら私たちの内に住まわれて、与えられた務めを全うさせてください。だから「わたしたちの内に住まわれる聖霊によって」なのです。すべてに先行する神の恵みへの信頼、そして、わたしたちの内に住まわれる聖霊への信頼。それこそが、私たちにとっても、恥としない生き方なのではないでしょうか。